

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

絶望的ですが明日も学校です

【作者名】

眠街暴徒

【あらすじ】

「絶望した!!!」

「糸色先生、今度はどうなさったんですか？」

「さよなら絶望先生なんて作品を小説で表現するなんて見るに堪えないじゃないですか!!きつと徹夜でアニメの批評をするクルーズ達にぼーぼーに詰られるに決まってるんです!!」

「なら、小説にしなければいいじゃないですか」

「それとこれとは話が別です」

「あの、もう用が済んだようでしたら帰ってください。ここは生徒の悩み相談を聞く場所なので」

「失礼しました。では、また改めて伺わせていただきます」

ガラガラガシヤン

「はぁ……………めんごくさい男」

第壹話 明後日の方向 に貴方がいるのはきっと必然／／／

「赤信号、みんなで渡れば怖くないと知人達が道路を横断しようとしている中。青信号になってから渡ると宣言した少年は今、人生の赤信号に引つ掛かっています」

教卓に手を付き、神妙な面持ちで教室全体を見据えていたのは和服に袴姿で黒ふちのメガネをかけた「2年へ組」の担任教師、糸色 望 だった。

キリツとした吊り目をキョロキョロさせながら、少し生徒の反応を窺う糸色 望は一つ咳払いすると、この静寂を静聴だといひように勘違いしたらしく話の続きを語り出した。

「みなさん、人生とは赤信号ばかりなのです!!。例えば、

・バイトを始めるため、親に押し付けられた求人誌に書いてある連絡先に電話しようと携帯を取ったはいいが、電話を掛けることを躊躇してしまい気分が乗らないことを言い訳に明日でいいやと立ち止まってしまったり。

・勇気を出して、自分の大好きなアイドルの握手会に参加しようとしたら握手券の有効期限が切れていたり。

・映画版ジャイアンの人気はうなぎ上りなのに、スネオの影はだんだん薄くなっていく一方だったり。

・JOLのビジネスクラスを予約したはずなのに勝手にキャンセルになっっていたり。」

他

・違法ダウンロードの方が法律として見直され、厳しく取り締まられるようになったはずなのに、オンラインゲームのチート一回で逮捕されたり。

・赤いスイートピーだったからミリオン売れなかったり。

・宗教団体の勧誘を断った瞬間ご近所の目が気になるようになったり。

「絶望した!!赤信号ばかりの世の中に絶望した!!」

「と、いうわけで今日は皆さんに現在から死ぬまでの人生設計図を書いていたのだと思います。」

もちろん、ただの人生設計図ではありません。

皆さんがこれから突然出会ってしまう赤信号に戸惑わないよう、今日は先生が皆さんの赤信号になりたいと思っと思っています。」

訳のわからない自論を言い終え、満足気にする糸色 望は数枚の紙を配り始めた。見出しに人生設計図診断表と書かれた紙にはいくつかの質問が書かれていて、内容が思っていたよりもまともだったので皆は少し警戒心を解いてしまった。

「それでは皆さん出来るだけ忠実に自分の人生を設計してください」

問一 あなたの夢はなんですか?また実現に至る歳はいつですか?

問二 出会いと結婚はいつですか?

問三 動物は飼いますか?飼うならいつ?

e t c . . .

数分後。

生徒から回収した人生設計図診断表をパラパラとめくり見ながら糸色 望は苦虫をかみつぶすような苦痛の表情を浮かべていた。イライラしているのか爪をカリカリと噛み出す。

この状況で何をイライラすることがあるのか分からず、クラスの中に不安とどよんとした重い空気が漂い出した。

しかし、そんな空気など糸色 望が読めるはずもなかった。

「これでは皆さんの人生はすでに赤信号で大渋滞！明るい未来に到達することなんてできません!!!」

「はいっ!!?」

いきなりの人生積んだ宣言受け、クラスメイト全員が糸色 望に抗議の視線を向ける。

それを代弁して一人の少女が立ち上がった。きっちり真ん中分けにされた前髪、スカート丈校則通りの膝下10cm、寸分違わぬハイソックスの丈。クラスで一番委員長らしい一面を持つ木津千里は糸色 望を強い視線で睨みつけ言った。

「先生！不安になればいいのか、怒ればいいのか、どっちか分からないような空気にするのはやめて下さい。そういうのイライラするんです！どっちかにして下さい」

「あ、はい」

みんながどう反応していいのか分からず戸惑っている。別件で空気を読めていなかった糸色 望も何のことを言われているのか理解できなかったようで、はいと言ってしまった以上とりあえず「皆さん不安がってください」と続けた。

言いたいことを言えてスッキリしたのか木津千里は着席した。

さつきよりは不安より統一された環境で糸色 望は先の話題に戻った。

「では仕切り直して、皆さんの未来はすでに赤信号一色なのです!! なぜなら、藤吉さん。あなた問一で、夢は雑誌に自己のマンガを週刊連載すること、実現は31歳だと書きましたね」

「はい。それが?」

「あなたは将来、夏コミに参加できなくなるという理由で必ず週刊連載を諦めます!!」

「なっ!!?」

「他にも、」

・アマチュア時代に出していた同人誌がネットに晒され話題になり連載中止

・印刷業者に「あなたの作品は刷りません」と言われ連載中止

けて言った。

「世の中に赤信号なんてありません。あれはハイチーズの合図です。そうに違いありません」

「どういことですか？」

糸色 望だけでなくクラスメイト全員が首を傾げる中、風浦可符香は待つてましたと言わんばかりに熱弁し始めた。

「だって考えても見てくださいよ。赤になるときに起きる出来事って普段起きないようなことばかりだと思いませんか？例えば、

・レッドカーペットを歩くジヨニデ

・サッカーの試合中レッドカードで選手退場

・明石家さんまと大竹しのぶの再婚

それってすごいシャッターチャンスじゃないですか？」

他にも、

・萬田さんが借り入れにストップを掛ける

・事業を起こそうとした総理大臣が官僚にストップを掛けられる

・モンスターハーターの新作をSONY機種以外で出す

「この作品だって決め台詞 絶望した！」「じゃないですか。立派な赤信号ですよ」

それを聞いて糸色 望は顎に手を当て、考えるような素振りを見せた後、なにかを思いついたらしく。

「それもそうですね。私も一度赤信号に向き合ってみましょうかね」

「そうですよーきつといい絵が撮れるはずですよー」

こうして今回の人生設計図診断は幕を閉じた。

それから数日後。

「今日から犬を飼い始めたのですが、私犬アレルギーで……息が

でき……な……い……」チーン

関内・マリア・太郎「結局シヌオチかよ」

第貳話 現代病

「奈美ちゃん何聞いてるの?」

「キャリパのnew single出たから思わず買ったんだ。聞いてみる?」

「え?!いいの?聞く聞く」

～視聴中～

【バイブス】高いね!!私ファンになっちゃっかも!!」

「でしょ!!」この曲私もお気に入りなの」

「この前彼氏に【KS】されちゃってさあ～もうほんと最悪

～【KS】とかマジないよね～」

「そうなんだ【KS】するとか酷いね。私なんかこの前【ヤグられて】さあ～マジ焦ったよ～」

「マジでww超ウケるわww」

「その言葉!意味を分かって使っていますか!!」

我慢の限界を超えた糸色 望は誰に言うでもなく叫んだ。

それを聞いた日塔奈美がビクツと肩を震わせた。それをあざとく見ていた糸色 望は意地悪な顔で意地悪な質問を投げかける。

「では、バイブスとは一体どういう意味なのですか?分からないなあ～教えてほしいですね～」

「そ、それは……………」

「それは?」

「楽しいって……………」とですか?」

「なんであなたが疑問形なんですか。ちなみにバイブスとはテンション、ノリ、雰囲気といった意味合いがあります」

日塔奈美が恥ずかしさのあまり走り去っていくのを気に止めることなく糸色 望は自分の話を続ける。

「昨今、自分たちも分かっていない若者言葉が流行りすぎている気がします。例えば、

シエルモ シェルモチーフ

サspan サspanダー付きパンツ

デニる デニーズに行く

Fラン 誰でも入れる大学

ロクマル世代 60代

デビルサマナー女子 厄介な女を連れてくるやつ

マミる 首飛ぶ

アイキャンディ 見ていて楽しい人

アイコ アイスコーヒー

パリラ王 くりいむしちゅー上田

a.k.a 別名

e t c . . .

「絶望した!!若者さえ置き去りするぞーしゃー(造語社会)世代に絶望した!!」

「先生無駄に若者言葉に詳しいですね」

「別に普段チャラチャラなんてしてませんよ」

額に汗を流しつつ強く否定した後、糸色 望はわざとらしく話題を戻す。

「みなさんあちらを見てください!!」

糸色 望が指した方を向くと、そこには簡易的な厨房が用意されていた。

「あれは若者言葉造形調理施設です。あそこから新しい若者言葉は生まれているのです!!」

「なっ!!?」

「これからの社会。誰もが若者言葉を正しく理解できるよう、取り扱った説明書を付けるように私が若者言葉造形調理施設に掛けあってこようと思っています!!」

「あっーちよっっ!!……」

そう言って糸色 望は若者言葉造形調理施設と呼ばれる場所へ走って行った。

糸色 望を一人にしておくわけにもいかないの、その後を少し離れて生徒達も着いていく。よく分からない怪しい場所に特攻を掛ける糸色 望と違い慎重だ。

キッチン台に置かれている物がはっきり認識できるくらい建物に近づいたとき、DV疑惑包帯少女の古節あびるが何かに気づいた。

「あれ何だろ」と彼女が指差す先を見ると、スーツ姿の二人の中高年の男が何かを神妙な面持ちで話していた。

「――中高年A「維新もそろそろ潮時だな」

中高年B「石原が代表を務めるようになってから党内は安定しませんからな」

中高年A「ところで【げっぷ】しませんかな」

中高年B「【げっぷ】ですか、なるほど」

中高年AB「フハハハハハハハ」

「なごめね……………」

皆がげっそりとした顔をする中、次は違う中年男が電話で話している姿を見つけてしまう。

「――中年A「もしもし広告見たんですけど【指名打者】90分お願います。」

住所は#####です」

ピンポン

インターホン「お電話頂いたものですが」

ガチャッ

中年A「チェンジで!!」

皆の顔が引きつるくらいげっそりしているところに涼しい顔で糸色 望が帰ってきた。

「説明書も読まずに皆さん若者言葉に触れてしまったんですね。無理もない。さっき私が工場長に掛け合ってすべての若者言葉に説明書を付けてもらえることになりました」

「工場長ってもしかして!!」

「はい、こちらの方です」

糸色 望の脇に立っていたのは金髪に装飾の多い帽子を被り、ギラギラのと派手なTシャツを着て、ダメージだらけのジーンズを履いた、サッカーが好きそうな男だった。

「こちらが若者言葉造形調理施設の工場長の本田さんです」

「ちっす」

「なんかイメージと違うー」

分かってはいたけど思った以上にチャラい感じな本田さんだった。

「本田です。ワン(今日一日)で此処の茶服(工場長)を務めることになりました。よろしくお願いします(です)」。

「あの先生、本田さんの言葉の後に括弧書きされてるのってなんですか?」

「あれが先ほど話していた取り扱い説明書です。言葉の詳細を知りたい方はこちらから検索してください <http://newworld.fc2.com/>

ちなみに、先で話していた若者言葉は、

天下り Golden parachute GP げっぶ

デリバリーヘルス DH 指名打者

といった感じです」

「それは雰囲気でなんとなく分かりましたけど……………」

「とにかく、これで若者言葉に悩まされることなく生活することができます」

「待ってください、先生」

とそこでストップを掛けたのは風浦可符香だった。

「どうしましたか風浦さん」

「このままだと個人情報が出回してしまいます!!」

「なんですって!!? どういうことですか」

「まずはあれを見てください!!」

「小森ちゃんのLineって88・58・92なの!? 意外とクリアランスなんだね」

「そんなことないよ」

「私もそんなIDがよかった」

「じゃあ交換する?」

「えっ!？」

臼井「ふうらふうらふうらふうら」

女生徒「ねえねえあの人が見て、マジ選んだけどwww」

女生徒「ほんとだほんとだマジ選だwwwきもいんだけどw

www」

女生徒達「wwwwwwwwwwwwwwwwwwwww」

臼井影郎が涙を噛みしめ逃亡。

「.....」

一連の流れを見終えた糸色 望は首を傾げる。

「これのどこが個人情報に関係しているのですか?」

